

# 申 上

『遠山霜月祭 上村編』(上村遠山霜月祭保存会2008)より引用・加工

七浦や八浦の塩を汲み揚げ申 流れの冷水はだきの衣として宮本の神主参り来たり 半畳の畳になほり十葉の蓮華をさし上げ申し 百八本の数珠をもみならし えびらの鈴をふりはやならし 黒釜や白釜とさわやぎ申して いとうの鼓の声を打やならし 大音の声を小音にあげ 小音の声を大音にあげ申して申さんことを聞入納受給はり候 夫れ抑々当り来る年月善き年号吉日始り申す 只今御年 平成〇年 干支〇の御年なれば 月の並びが十二ヵ月 日の行く数が三百六十五ヶ日 ことにも取分け今礼今年霜月朔日始り申す 十日に余り十一日の日じん 只今巳午が入りて神に立命仏に和合がつき 天に白金の花が咲き 地にては黄金が吹き立ち上る 竜神のみとは聞く 平は治る祈は叶ふ 神かど神立命がしんの剋を取上申して申さんことは 雀の千声より鶴の一声聞入納受給はり候と謹んで敬って白す

夫れ信州伊那の郡伴野の庄門村に御立ちはやらせ給ふは源王大神 政王大神 両八幡 先旗の正八幡 五郎姫宮 八王神 住吉 日吉 淀の明神 一の宮に 富士天伯までも此湯上三寸へ勧請じ申奉る 東方の王神は太郎の王神 浄土を申せば薬師の浄土 方を申せば丙丁の方にて候 南方の王神は次郎の王神 浄土を申せば観音の浄土 方を申せば酉丁の方にて候 西方の王神は三郎の王神 浄土を申せば阿彌陀の浄土 方を申せば戊己の方にて候 北方の王神は四郎の王神 浄土を申せば御釈迦の浄土 方を申せば庚申の方にて候 中央の王神は五郎の姫宮 浄土を申せば大日本大小不動の明王 方を申せば壬癸の方にて候 一万三千のみしめの王神 七万七千はしめの御王 このみしめの内へ請じ勧請申す 大日本六十六ヶ国の大小の神祇の御前所を千道八ッ橋十六ぜん ひなの御前を引上申して 八人の八乙女 五人の神楽男を打ちやそろへて御前所をたしなみ申して聞入れ納受給はり候

夫れ天の大毛は羽を並べ翼は口を揃へ しし狛犬は蹄を揃え 土はう虫はろくろを定め とみねが奥にて早男鹿のハッの御耳にえびらの鈴を振るるが如く 八社のおん神の前所を嗜み申して申さんがため 宮元の神主参り来り氏子氏子の前でも流れの冷水肌着の衣として 岩のこばせに半帖畳にまる寝を致し 松の葉よりも尚細き 柳の葉よりも尚長き 丹精のはごみを申し申せば 香味の御酒に紫の御料 白金や黄金のさんごうを鮮かに御開き給えば 御前所を嗜み申して三千の諸仏を給るならば シンジャヤ ホンジャヤ きくじや 玉の御宝殿までも聞入れ納受賜り候 それ夜に驚きなく昼に騒ぎなく 夜をば戸長 昼をば間長 大とうにつまげなく しんの枕に傾きなく 真澄の鏡に曇りなく 箱にて塵を寄するが如く 瓜の蔦々玉の枝までも御守り給り候

穂が三尺 実入りを申せば石や金目の装束なり 秋の田をばせま地に千束 まゝ地に万束刈や納めて くによ九日の数のつつえを取りやととのえ 大米千櫃 小米千櫃 よい酒千瓶 白酒千瓶 取りやととのえ上げ参らす程の御利生を給り候 枡に入かえ蔵の下積をはげくむ程の御利生を給り候 のこるところを飯にかしげば蓬来の山となる 酒に造ればなん海の水となる のめども減らず 汲めども盡せず

夫商冥賀を給るならば 朝商が十万貫 昼商が十万貫 夜商が十万貫 合わせて三十万貫の宝を売とめ申せば買いとめ申す 重き宝は蔵の下積に 軽き宝は蔵の上積に 蔵の下積みをはげくむ程の御利生を給り候

夫れむしやの宝を給るならば 春の蚕がいが十六膳 夏の蚕がいが十六膳 合わせて三十二膳の白毛の御神四度の起臥難なく くせなくつつがなく起させ給う まゆのごせいは鶴の子ばせに作らせ給う まゆの堅さは前なる鴨の河原の雌石雄石を存ずる如く造らせ給う それ六月上旬 綿むき上手に綿むかせ 糸とり上手に糸とらせ 物の上手に綾や錦を織らせ 七重の御戸帳を懸け参らす程の御利生を給り候 のこる絹をば 神へ参るに十二の小袖を袖口揃え参るにいさみ

げこうかんぞく上に一体 下には万人の人にふき仰がる程の御利生を賜り候 遠くの人は聞いて羨み 近くの人は見て楽しむ程の御利生を給り候

遠くに聞こえしかすみから風 多方の風は七里が内へ十二ヶ方へ相や鎮めて 天万神は天へ捲き上げ 下方神は大地へ七尺踏や鎮めて 七里が内へ十二が方栄華の里 福が里と御守り給り候と謹んで敬白

平の御神に変わりて福が長者 賀茂が長者と謹んで敬白